

旧入広瀬村民俗資料館（手仕事手ほどき館）

建物痕跡史実調査報告書

長岡造形大学 平山育男

平成 23(2011)年 02 月

目 次

本 文

- 1 はじめに
- 2 調査の概要
- 3 建物の歴史
- 4 建物の概要
- 5 建物の復原
- 6 建物の特徴
- 7 さいごに

図 面

写 真

*印写真は田村収撮影

本 文



1 はじめに

旧入広瀬村民俗資料館は、旧浅井秋雄家住宅主屋を譲り受けて開館したものである。ところで、入広瀬村が合併を行い魚沼市となり、平成 21(2009)年には同館の敷地と建物が処分されることとなった。建物は、手仕事手ほどき館（代表森田徳幸）に譲渡されて活用されることとなった。

一方、この建物の改修・活用に際しては、財団法人新潟県中越大震災復興基金の平成 22(2010)年度の地域復興支援事業(地域特産化・交流支援)補助金の交付を受けるため、本建物「旧民俗資料館(手仕事手ほどき館)」の歴史的価値について学術的に調査する必要性が生じた。

このため、一連の建築面における基礎調査が長岡造形大学へ委託され、長岡造形大学平山研究室がこの調査などを行い、報告書を行うものである。

2 調査の概要

・調査の概要

業務の対象地は

新潟県魚沼市大栃山 183 番地 1

であり、ここに所在する

「旧入広瀬村民俗資料館（手仕事手ほどき館）」

である。

業務の内容はこの旧入広瀬村民俗資料館（手仕事手ほどき館）について、建物痕跡及び史実調査を行ってそれを作図等すること、加えて調査の成果の発表を兼ね、「ワークショップ」などを通じて広く告知するものである。

・ 調査実施の内容

現地の調査は以下の要領で実施した。

平成 22(2010)年 7 月 10 日 (土) 10:00～13:00

参加者

平山 育男 長岡造形大学造形学部 教授
西澤 哉子 長岡造形大学デザイン研究開発センター 研究員

作業内容

作業内容の打合わせ
調査箇所の下見

平成 22(2010)年 7 月 25 日 (土) 9:30～18:00

参加者

平山 育男 長岡造形大学造形学部 教授
西澤 哉子 長岡造形大学デザイン研究開発センター 研究員
梅嶋 修 長岡造形大学デザイン研究開発センター 研究員
松尾 亮輔 魚沼市農業公社 職員
金井 由紀 長岡造形大学造形学建築・環境デザイン学科 3 年

作業内容

実測図作成
復原図作成／復原考察

平成 22(2010)年 8 月 1 日 (日) 9:30～18:00

参加者

平山 育男 長岡造形大学造形学部 教授
西澤 哉子 長岡造形大学デザイン研究開発センター 研究員
梅嶋 修 長岡造形大学デザイン研究開発センター 研究員

田村 収 写真士・TAMURA
松尾 亮輔 魚沼市農業公社 職員
金井 由紀 長岡造形大学造形学建築・環境デザイン学科3年
風間 真 長岡造形大学造形学建築・環境デザイン学科2年

作業内容

実測図作成
復原図作成／復原考察
写真撮影

平成23(2011)年2月5日(土) 11:00～12:00

参加者

平山 育男 長岡造形大学造形学部 教授
西澤 哉子 長岡造形大学デザイン研究開発センター 研究員

作業内容

魚沼民家塾にて講演／意見交換

3 建物の歴史

この建物は、もともと浅井秋雄家住宅として建てられたものである。魚沼市の資料によれば明治 20(1887)年の建築とされる¹が、後述のように建物調査からはそれ以前の建築に関わる性格を見ることができた。

建物はかつて住宅主屋として使われたものが、当時の入広瀬村へ譲渡され、入広瀬村民俗資料館として活用されていた。当時は茅葺であり、その姿を昭和 55(1980)年 3 月に発刊された『越後の民家 上越編』²等で見ることができる。外観は屋根が鉄板で覆われた以外、現状と大きく変わるところは認められない。

そして、旧入広瀬村が広域合併を行った後、この敷地と建物の処分が決まり、譲渡が行われた。



① 入広瀬村立民俗資料館(北魚・入広瀬村大字大栃山)
(旧浅井秋雄家 同所)

¹ 魚沼市：市報うおぬま，平成 21(2009)．7/25 に、“建築年 明治 20 年”とある。

² 新潟県教育委員会：越後の民家 上越編 新潟県民家緊急調査報告 I、昭和 55(1980)．3

4 建物の概要

・位置

旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）は、魚沼市大栃山 183-1 番地に位置する。場所は JR 只見線入広瀬駅西側に隣接し、線路とは公道一本を隔てた地点となる。

・敷地

住宅の敷地は、東側と南側 2 方向が公道に接する角地となるやや矩形の敷地で、広さは東西 30m 程、南北 25m 程の規模で、面積は約 570 m²で、敷地北東角に主屋入口を設け、南西角に東面して石造の屋敷神を配している。

・主屋の規模

旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）主屋は中門造の形式で東面し、右勝手となる前中門と後中門が本屋に取り付き、寄棟造で茅葺鉄板被覆、前中門部分はかぶと造、後中門は寄棟造で鉄板葺とする。

規模は本屋が桁行 3 間、梁行 3 間半で背面に一部 2 尺、下手に 1 間の下屋、正面及び上手に下屋で物置とガングィが取り付く。表中門は桁行 3 間、梁行 2 間半で、正面側入口が一間の下屋となる。裏中門は桁行 2 間半、梁行 5 間と 1.5 尺間とする。

・平面

主屋は、前中門妻面がゲンカンとなる。傍らが物置となり、下手に小便所、大便所が取り付き、大戸を挟んで幅 1 間のトオリを進むと、下手にはマヤが残る。式台を上がると板敷のニワで、南西に偏り、戸棚前に囲炉裏が切られ、下手に物置が造られる。そしてこの上手が 17 帖半のチャノマで、現状では天井を張らず、表しとする。更に上手は 14 帖のザシキで、背面に床の間、仏壇を構え

る。なお、チャノマ及びザシキ正面から南側にかけて下屋で物入、板敷のガンギが設けられている。後中門は、ニワ背面が、ダイドコロ、ユドノで、チャノマ背面に下手から、ウラチュウモン、オリバ（織場）とする。

2階はまた、表中門上へはニワから梯子階段で登るワラニカイ、更にニワとザシキ上が小屋裏とされる。裏中門の2階へはウラチュウモンから箱階段で登り、廊下を挟んで下手から和室6帖、和室10帖がいずれも表側に床の間を構えて配され、和室10帖裏側は幅2尺の板の間とする。

・ 建物の構成

本屋に内部に立つ柱は7寸角のものが2本で、ニワ-チャノマ、チャノマ-ザシキ境に1本ずつとなる。外周に立つ柱は4~5寸幅のもので、部屋境に立つ柱などに一部ごひら材が散見された。前中門はゲンカン際に5寸角の独立柱があり、他は4~4.5寸幅であるが、南東角はごひらで5.4寸×4寸の材であった。後中門は4~4.5寸幅の材とする。

軸組は各所で指物を用い、柱を省く。特にニワ-チャノマ、チャノマ-ザシキ境に配される、長さ2間半、高差2尺半に及ぶ指物は豪快である。

梁組は、本屋においては敷梁を1間間隔で2通し渡し、その上に、上屋梁を部屋境を中心に1間以下の間隔で7通し配し、先端がせがい梁とする。前中門では2階床梁を側柱が側面で受け、上屋柱は梁上に立てる管柱となる。そして、敷梁間に1間半長さの上屋梁を架け、下屋梁が本屋と同高でせがい梁となる。後中門は本屋背面側筋から、各階とも背面へ向けて2階床張り、小屋梁を半間間隔で差し渡す形式とする。

小屋組は本屋が前後の側柱間を一気に架け渡す扱首組で、中央に水梁を渡す。前中門は、下屋造りとする扱首組であるが、注目すべき点は、扱首が下屋まで伸びて、追扱首は用いず、しかもその先端が片持ちで、下屋梁となるせがい梁は外周の桁が受けていない点である。後中門は和小屋組とする。扱首の勾配は本屋が12.7/10、妻面が16/10、前中門が12/10とやや急峻なものであった。

なお、壁の下地には小舞を用いるが、割竹は用いず3分角程の雑木の先端を尖塔形に削り出し、柱の小舞穴に挿入し、竹釘の使用は認められなかった。

5 建物の復原

・建物の復原考察

旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）本屋の部屋境などに大きな改変は見られなかった。

但し、ザシキ床の間及び明書院が後の改造で、部屋の長押も洋釘止めであり、中古の改造・整備と判断される。また、2階小屋裏の窓も中古の納まりであった。表中門は後述のように番付も本屋と一体であることから当初からのものであるが、やはり側面の2階窓は痕跡から中古と判断された。

後中門は、聞取りによれば80年程前の建築とされ、材はいずれも当初には遡らないものであった。但し、主屋背面には奥行1.5尺程の規模を有する下屋が取り付いたと考えられる痕跡が残っていた。ザシキ部分は中古に拡張を受けたが、いずれも当初は棚程度の利用に過ぎず、後中門はなかったものと判断できよう。



主屋 北東隅木 隅木に被せられる笠木は当初の1材で和釘止めとする



主屋 チャノマ背面棚柱 北東より
宛木を外すと貫の仕口痕跡があり壁に復原される



主屋 座敷床の間背面柱 北東より
「外巻 四」と読むことができる。当初床、棚部分は当初と見ることができる。

・ 建築年代

前述したように、『市報うおぬま』においては、この住宅の建築年代を明治20(1887)年としている³。一方、民家緊急調査報告書である『越後の民家 中越編』において、この建物の建築年代は“間取や柱のたち方をみると十九世紀であろう”と判断している。

さて、調査に際して建築年代を直接記す資料は見い出されなかった。但し、各所で和釘の使用が認められ、少なくとも明治時代中期以前の建築に関わるものと判断された。一方、本屋部屋内に独立柱はなく、部屋境に2本の7寸角材を配する発達した構成を見る。これらの点を根拠とした編年から『越後の民家 中越編』⁴でも建築年代を19世紀としたのであろう。

ところで当住宅の現状平面を見ると、近隣の市内旧守門村佐藤家住宅の昭和55(1980)年修理前の平面、外観⁵に極めて近似することが分かる。更に、この住宅主屋を復原すると当初平面は、この佐藤家住宅主屋における19世紀中頃とされる第二次改造時平面⁶に極めて類似することが判明した。特に前中門における、うまや、便所、とおりの配し方や正面妻面の柱配置はほぼ同一であり、近い建築時代を想定することができる。

以上から、旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）主屋の建築年代は、19世紀中頃と判断するのが妥当であろう。

³ 魚沼市：市報うおぬま、平成21(2009).7/25号における「おしらせ」では本建物の建築年を“明治20年”とするが、恐らくこれは家屋台帳における登記の年代を示すものであろう。

⁴ 新潟県教育委員会：越後の民家 中越編 新潟県民家緊急調査報告Ⅱ、68頁、昭和54(1979).3

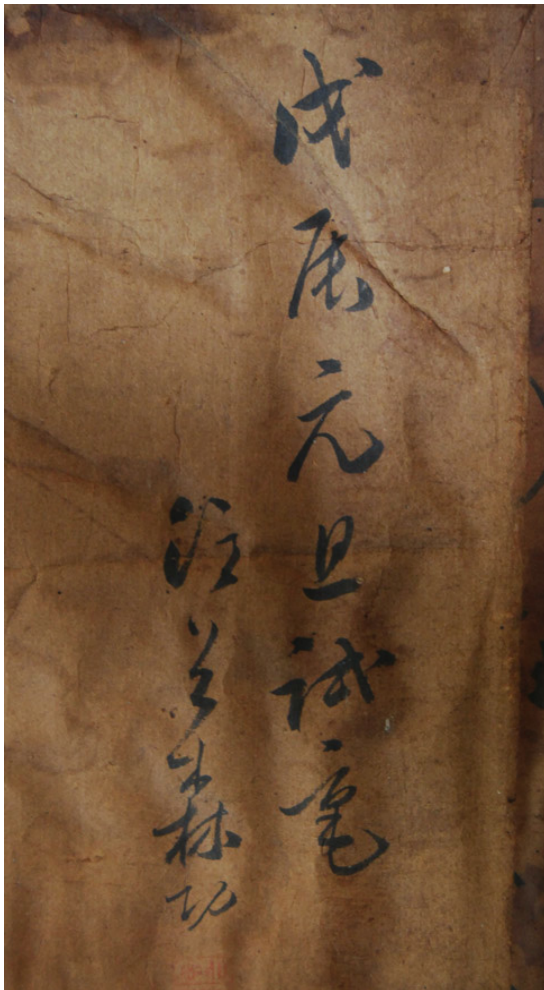
⁵ 重要文化財佐藤家住宅保存修理委員会：重要文化財佐藤家住宅保存修理工事報告書、巻末図版、写真昭和55(1980).8

⁶ 重要文化財佐藤家住宅保存修理委員会：重要文化財佐藤家住宅保存修理工事報告書、24-25頁、前掲

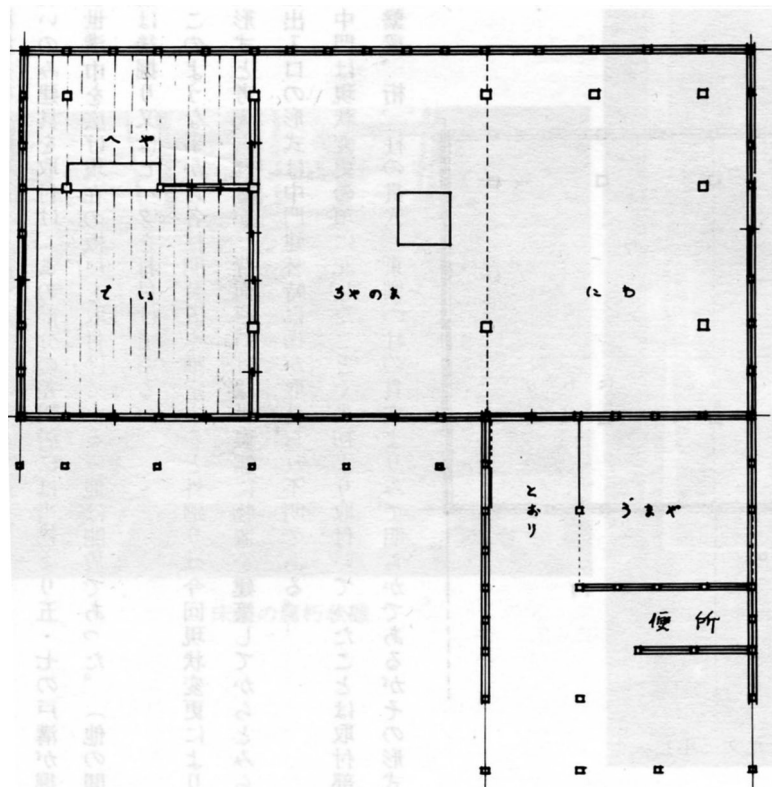


上：ざしき 東より

左：ざしき板戸背面

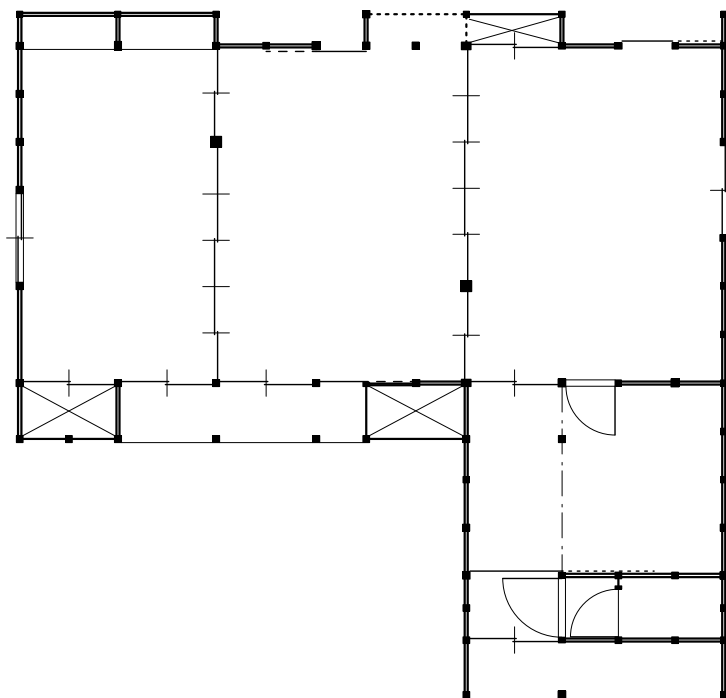


ざしきの押入は、板戸 3 枚立であったが、まん中に納まる板戸背面には写真左に示す墨書銘を持つ墨絵が張られ、“戌辰元旦”と読むことができる。これは明治元（1868）年となり、建築年代を考える一つの材料ともなるだろう。

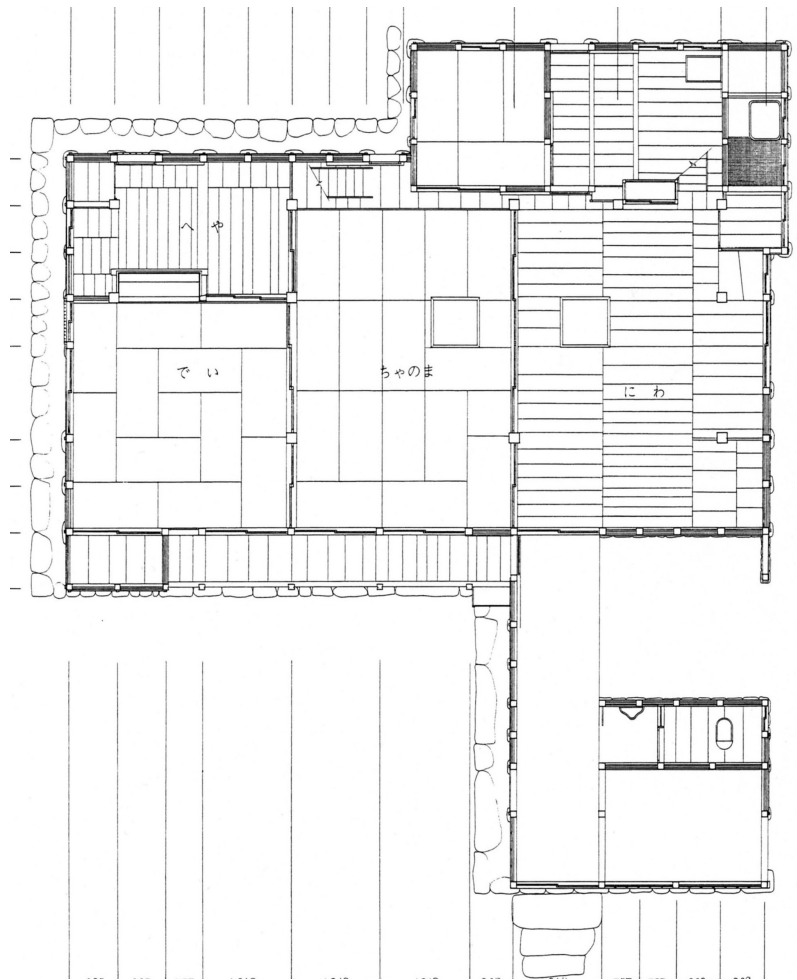


第二次改築時（中門建替）平面図（19世紀中頃）

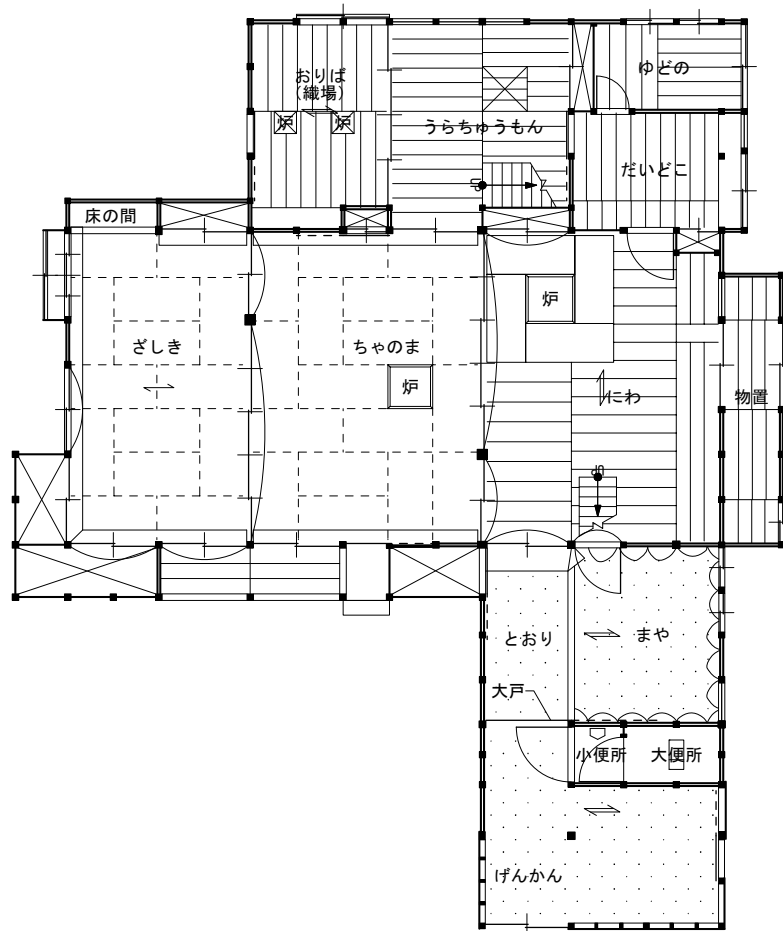
佐藤家住宅第二次改造時平面図



旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井秋雄家住宅）主屋当初復原平面図



佐藤家住宅 修理前 平面図



旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井秋雄家住宅）現状平面図



佐藤家住宅 修理前 背面外観
修理工事報告書より



旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井秋雄家住宅）背面外観

6 建物の特徴

旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）主屋は比較的太い柱を配し、屋根勾配がきつく、深雪地域の住宅の特徴をよく示す。

建築年代は19世紀中期になるもの考えられるが、これは近隣の魚沼市旧守門村佐藤家住宅の19世紀中頃とされる第二次改造時平面と極めて近似し、地域が共有する建築に対する考え方の広がりを見ることができる。また、主屋の建築には間数組合番付が用いられており、これは時代と地域の特性をよく示す構成となっている。

但し、前中門の小屋組において、扱首材先端が片持ちになる点はこれまで類例が報告されたことはなく、この建物独自の構成で極めて特徴的な点である。

7 さいごに

旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）主屋の調査から明らかになったのは以下の諸点である。

- 1) 旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）主屋は19世紀中期頃の建築で、前中門は当初から一体の構成と判断される。
- 2) 当初平面は国指定重文佐藤家住宅の19世紀中期の改造平面に極めて類似する。
- 3) 前中門扱首は先端を片持ちとして、追扱首を用いぬ極めて稀な構成とする。
- 4) 旧入広瀬村民俗資料館（旧浅井家住宅）主屋は当初、間数組合番付を用いる。
- 5) この建物では壁下地に雑木の角材を用い、竹釘の使用は認められなかった。